

地獄極楽道中案内

——六道絵に見る他界観——

(下)

鷹 巢 純

八、地獄めぐり

一番最初に巡って行く、一番軽い地獄は、等活地獄という地獄があるのですが、今回はちよつと省略いたします。あまり地獄をたくさん回っておりますと晩御飯が美味しくありませんので、軽く済ませましょう。

(図46) その次の黒繩地獄です。八大地獄のうちの軽い方から二番目のラッキンクに属するものです。出光美術館の「六道十王図」の方では、こちらに描かれています。二本のポールが立っていて、そのポールの間ワイヤーロープが張られます。そのワイヤーロープは真つ赤に熱せられていて、そこを渡ろうとする亡者たちは背中に大きな岩山を背負わされ、重いやら熱いやらで、つい手を離して落っこちてしまうと、下の方で、これは何かという、釜が煮えたぎっているわけなのです。煮えたぎる釜の中に落っこちてしまふ。で、ぐつぐつと茹でられてしまふ。重いやら熱いやら茹でられるやらで、



図46-a



図46-b



図48-a



図48-b

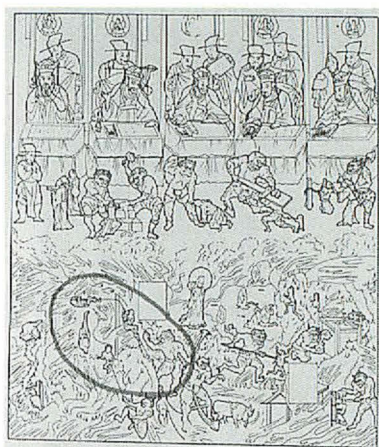


図47-a



図47-b

なかなか大変な地獄なのですが、そうした地獄が描かれています。落っこちない、しぶとい人は放り込まれたりもするのですが、そうした様子が描かれています。

(図47) これは「十王地獄図」の方でもありまして、やはりポールが二つ立てられて、その間にワイヤーロープが張られて、そして岩山を背負わされた亡者が渡って行き、大分観念した表情で落ちて行く、下には煮えたぎる釜が待っている、そんな地獄が描かれています。

(図48) それよりももう一ランク重い地獄として、衆合地獄という地獄があります。衆合地獄の責め苦の最も代表的なものとしては、刀葉樹というものがあります。これは出光美術館の「六道十王図」の方の衆合地獄の刀葉樹ですが、どんなふうになっているかと申しますと、亡者が林の中を通って行くと、木の上からおねえさんの声がするのです。見ると、きれいに着飾ったおねえさんが、「私はあなたのためにここまで来たのだから、ここにいらして」と呼んでくれます。男の人がうれしくなって登ろうとすると、木の葉が全部下を向くのです。木の葉は全部刃物になっているのです。一所懸命



図50-b



図49-a

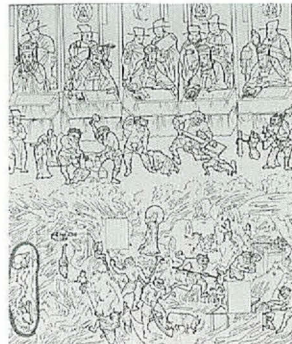


図50-a



図49-b

登ろうとすると、体がずたずたに切り裂かれる。やっとこさ登った
 と思つて、「おねえさん、どこ」と言うと、おねえさんは下にいるの
 です。「私、あなたを追いかけてここまで降りて来ちゃった。来て」
 と言うわけです。また降りようとすると、葉が今度は上を向く。ま
 た体がずたずたになつて降りて行かなければならない。以下、繰り返
 返しです。これを見るたびに男の悲しい性というものを感ぜずには
 いられないわけですが、そうした地獄がある。よっぽど男として悲
 しかったのでしょね、出光美術館の「十王地獄図」の方では、非
 常にまれな刀葉樹の様子が描かれているのです。

(図49) こちらは女性を男性が追う、通常のパターンです。これはサービ
 スですね。おねえさんが上半身が裸です。それは一所懸命にならざ
 るを得ません。男の人、一所懸命登ろうとしています。これはよく
 よくあるパターンなのです。

(図50) 右の幅のこつち側の幅のちょうど反対側の位置にその逆のパター
 ンがあるのです。上にいかした男がいて、女性を誘うわけです。「僕
 は君のためにここまで来たよ、来ない？」なんてことを言ってくれ
 るわけです。思わず彼女は、「うわ、いい男」と思つて登つてしま
 います。

実は、このパターンは『往生要集』などのお経の中にはないので
 す。お経の中に出て来るのは、男が女を追いかけるというパターン
 だけです。でも、多分、画家も何か悔しいものがあつたのでしょ、
 こうしたものを描き加えてしまう。地獄絵というのは、ものすごく

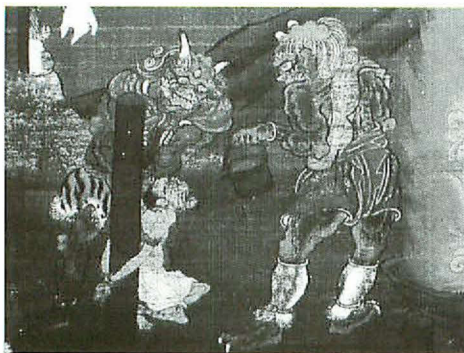


図51-b



図51-a

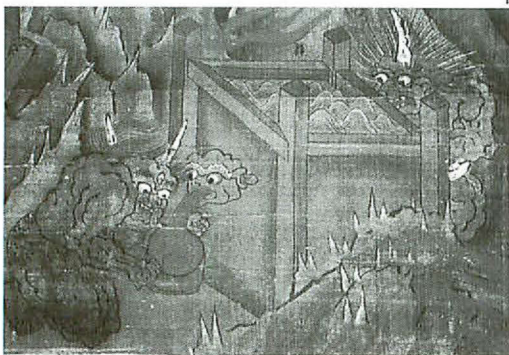


図52-b



図52-a

図柄がたくさん出てまいりますから、こうした遊びが入り込む余地が結構あるのです。先ほどのお坊さんが稚児を背負って行くというのも一種の遊びです。そうしたことを探すのも、地獄絵の一つのお楽しみです。出光の「十王地獄図」はなかなかおつなことをやってくれるなど、男性は喜んで見てしまうわけです。

(図51) そして、その次、ちよつと途中をはしりまして、叫喚地獄に参ります。地獄もだんだんネタが尽きてまいりますと、ぱつとしないものが出て来るわけですが、叫喚地獄はちよつとぱつとしません。どんなものかと言いますと、これは出光の「六道十王図」の方からピックアップしたのですが、真っ赤に熱して溶かした銅を飲ませるといふものです。熱いですね。飲んだ銅は体を焼けたらせながら下まで突き抜けて行つて、お尻の穴からどろろと流れ出る、そういうふうにお経の中では描写されています。これなどですと、割合に手軽にまとめていられるようです。ちゃんと右側に銅を溶かすための炉が用意されていて、それで溶かしたやつをここに入れるのだよということがわかるようになっていきます。

(図52) 同じ出光美術館のものでも、「十王地獄図」の方はもう少し様子が細かく表現されています。この辺に描かれているものなのですが、まず、注ぎ口のなかなか可愛らしい、ファンシーな炉が用意されていますが、ここで銅が溶かされているわけです。右側の獄卒がファイゴ係です。ファイゴで銅を沸かして、左側の獣面から流し込むようになっていっているのです。ちよつと洒落ています。



図54-b



図54-a

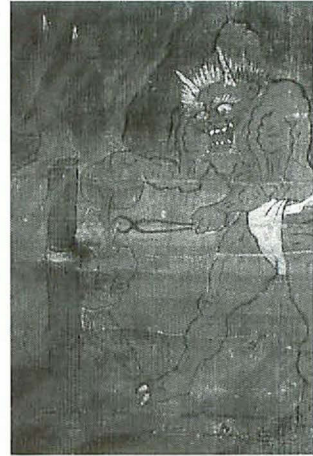


図53

(図53) それからこの器に入れて持つて行つて、そして流し込む。こういう時によくやつとが使われます。亡者だつて銅の汁は好きではありませんから、口を開けようとしないうけです。そういう時には、やつとこでばーんと歯を割つて口をこじ開けるといふふうにお経では記されています。なかなかひどい扱いですね。

(図54) これが割合に皆さんにも評判のいいものなのですが、大叫喚地獄の責め苦です。ここの部分を拡大したものです。これは何かというと、ペロです。ペロの持ち主は右上のこの人です。ここからうわあつとペロを広げているわけです。まるで八畳敷のような広がり方をしています。その上を牛に鋤を引かせて耕してしまうという地獄です。なかなか派手ですね。

これは派手だったから、日本の地獄絵や何かに非常にたくさん用いられるようになります。しばしば日本の地獄の表現というものは、恵心僧都源信が平安時代に書いた『往生要集』に基いていると言われるのですが、実はこの地獄は『往生要集』には出て来ません。どこに出て来るのかというと、中国から輸入された十王図の中に描かれた責め苦としてはちよくちよくあるのです。そうしたのを見ている、日本人が、「これは面白いね、これを僕たちの地獄にも入れようよ」という話をして持ち込んで来た気配がありまして、時々出てまいります。

『往生要集』には実は阿鼻地獄の責め苦としてこれと似たものが出て来まして、ペロを延ばすのですが、牛で耕しません。びろーん



図56-b



図56-a



図55-a



図55-b

と伸ばして、杭でペロを広げたところに虫がたかって来るといふ図柄です。虫がたかって刺しますから、これは痛いですよ。そういうものが出て来ます。

〔図55〕 これは「六道十王図」の方ですが、出光美術館の「十王地獄図」の方でも、やはり耕しているのです。左端に人がいます。この人からペロが出て来まして、牛が鋤いている。こっちの牛の方が働きもののような様子があります。耕しています。そのようにして責められる。これは痛いですね。大叫喚地獄です。その後、阿鼻地獄まで行くことになるわけなのですが、以下省略させていただきます。

九、餓鬼道・畜生道・阿修羅道

そうやって地獄の責め苦をつらつらと体験した後、今度はどこへ行くのかというと、餓鬼の世界に参ることになります。餓鬼の世界をひとつ見てまいりましょうか。

〔図56〕 出光美術館の「六道十王図」の方には餓鬼の描写も出てまいります。餓鬼というのはお腹を空かせた存在でして、水を飲もうとしたり、御飯を食べようとしたりする。喉が乾いていますから、お腹が空いていますから、水も飲みたいし、御飯も食べたい。

けれども、そうしたものを飲もうとすると、食べようとする、みんな火になってしまうのです。だから食べられない。あるいは食

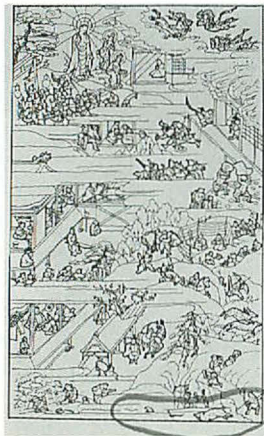


図59

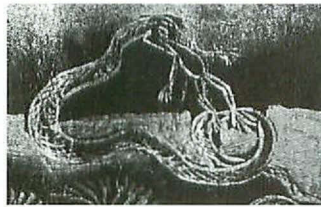


図58

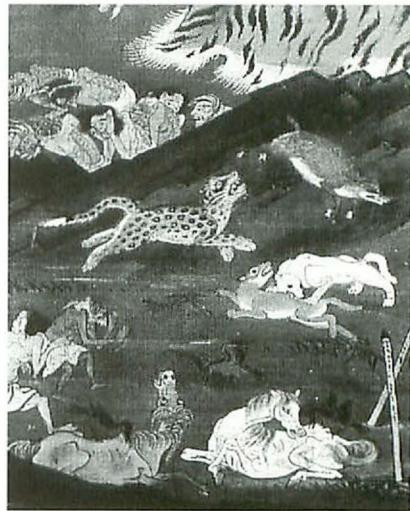


図57

べる物がすく制限されている者もあります。例えば、自分の脳味噌しか食べられない餓鬼などというのお経の中には出てまいりますし、あるいは昼に五人、夜に五人子供を生んで、その子供しか食べられないという餓鬼もいます。あるいは、物を食べたいのだが、口が針の穴のように小さくて、ほとんど御飯が口の中に入らないという餓鬼もいます。そうしたさまざまな餓鬼が登場しています。ここでは水辺の餓鬼が共食いしています。「痛いじゃないの」と、この餓鬼が怒っています。かじっています。

(図57) そうした餓鬼の世界の次は、畜生道、動物の世界です。動物の世界の苦しみは何かというと、何よりも弱肉強食の世界であるということです。出光美術館の「六道十王図」の中では、弱肉強食の様子がいろいろに描かれています。猪が豹に追いかけていますし、犬同士は喧嘩をしていますし、馬は鳥か何かにお尻をつつかれています。牛や馬が鳥につつかれるというのは畜生道の図像としてよく出ていまして、鳥って獐猛なのです。そんな様子が描かれています。

(図58) そうした動物世界の弱肉強食の苦しみはいろいろところで絵画化されています。こちらに挙げておきましたのは、蛙が蛇を飲み込んでいるところです。これは金色堂で有名な中尊寺にありました「中尊寺経」という写経の挿絵の中に出てくるモチーフですが、やはり弱肉強食の世界ということで動物世界の苦しみが語られていることがわかります。蛇が蛙を飲み込むというイメージは、後にどんど

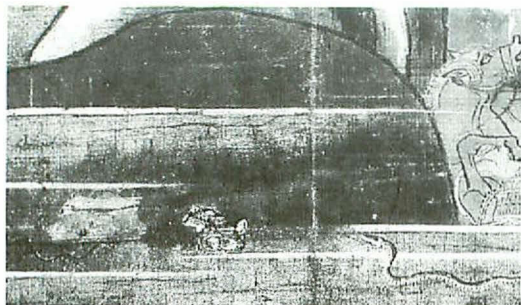


図62



図60



図61

らんどん話が膨らんでいくことになるのです。

〔図59〕 その最たるものは、出光美術館の「六道十王図」の第六幅目の非常に目につきにくい片隅に出てまいります。この図柄を右から見ていくことにしましょう。

〔図60〕 猪が狐師に狙われているのです。なるほど、動物って苦しいなと思いかも知れません。

〔図61〕 だけれども、その猪を見ますと、猪は蛇を追いかけているのです。わあ、弱肉強食だ、蛇も大変だと思えます。

〔図62〕 だけれども、蛇は蛙を追いかけているのです。わあ、蛙は大変だと思いかも知れませんが、よく見ると、蛙もじっと目を凝らして何を見ているかというところ、ミミズを狙っているのです。

狐師は猪を追いかけて、猪は蛇を追いかけて、蛇は蛙を追いかけて、蛙はミミズを狙っている、そうしたような図柄。弱肉強食を説明しようとしているのでしようが、随分と話が長くなっています。さらには、この狐師を鬼が狙っているというパターンのものもあります。そんなようなものがしばしば出てまいります。動物世界の弱肉強食の苦しみも画家の気持ちをくすぐったようであり、時代が下れば下るほど、話が大げさになっていったりしていたようです。これが動物世界の苦しみです。

人間だって動物に生まれ変わるのだよということを使うわけですが、地獄に落ちるかもしれないが、動物に人間が変身するというのはどうもぴんとこないという人たちが多かったようです。です



図64



図63-b



図63-a



図65

から、「六道十王図」では、いやいや、人間が動物に変わったたりするのだよということ強調するための図柄を入れておくことがあります。出光美術館の「六道十王図」にもあります。

(図63) それはここに出て来るのです。これです。何しているかわかりませんが、地獄の鬼が亡者たちを追いかけているのですが、手にしているものがポイントです。何でしょう。動物の尻尾です。何しようとしているのか。この尻尾を亡者の尻につなげようとしているのです。動物の一部をくつつけることによって、その人を動物化する例はいろいろなところに出てくるのです。

(図64) これは京都の二尊院の「十王図」の中の一場面なのですが、この部分をちよつと拡大してみました。

(図65) 見てください。犬に見えますが、よく見ると、手が人間です。どういうことかという、犬の毛皮をかぶせて、人間を犬に変えているところなのです。使用前、使用后、その中間の部分です。手前の人は、犬にさせられてはかなわないと一所懸命逃げているところで、うしろの人はもう犬になってしまったところなのです。そうした様子が描かれています。

こうしたものを見ると、ああ、本当だ、人間は犬になっちゃうかもしれないという気持ちにおそらく昔の人はなったのでしょね。確かに今見ても、この図柄はショッキングです。出光の「六道十王図」の場合はちよつと陽気な感じがしますけれどもね。そうやって動物の一部をくつつけたり、あるいは動物の毛皮をかぶせたりする



図67-b



図67-a



図66

ことよって、人間を動物に変えるというような表現は中国の絵画にも見られます。東アジアで一般的に見られた、人間を動物に変身させる一つのイメージとしてあつたようなのです。そうしたことがこんな所に出てきたりもします。

(図66) そうして畜生にもなるのだなということを確認した上で、阿修羅道です。これは出光美術館の「六道十王図」の阿修羅道の場面。阿修羅道と申しますと、阿修羅と帝釈天の戦いで表現されることが一般的ですが、面白いことに、これも実は「往生要集」には出て来ないのです。「往生要集」では帝釈天と戦うなどということは一言も触れられていないのですが、これもどうも日本人の伝統的な考え方で、天の王様といったら帝釈天だよなということがあつて、「往生要集」で帝釈天のことを言及しなくても、帝釈天をここに引っぱり出して来るといことが続いていたようなのです。

(図67) 今見ていただいているのは、このあたりの部分です。帝釈天が象に乗って、今まさに阿修羅に攻めにかかっているという様子が描かれています。

実は、この絵の中で一つ、面白い表現がありまして、それは何かというと、ちょうど帝釈天の軍勢と阿修羅の軍勢が衝突している所です。

(図68) ここにこんなものが出て来るのです。阿修羅の方から放った矢が蓮の花になってしまっているのです。これはちょっと変わった図柄です。実は、阿修羅と帝釈天との戦いの中で、阿修羅の放った矢が

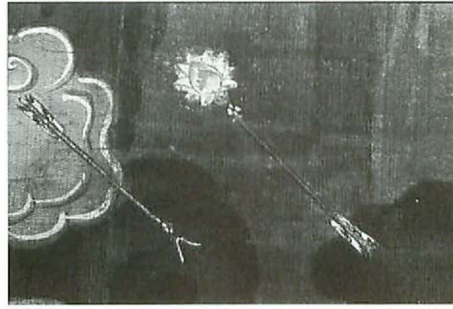


図68-b



図69



図68-a

蓮の花になってしまふなどという記述は出て来ません。これは一体何なのだろうかと思っていましたら、どうもこういうものらしいのです。

(図69) 今日も出光美術館所蔵のものが展示してありますが、「絵因果経」の中で、瞑想に入っているお釈迦さんを邪魔しようとして、第六天魔王が矢を射かけるのです。射かけた矢が途中（ちょうど岩を越えたあたりですね）で蓮の花になってしまったというような絵柄が出て来るのです。出光美術館の方にお伺いしましたら、つい一昨日まで、この場面が出ていたそうです。一昨日までの間に一度御覧になられた方は御覧になっていらつしやるかもしれませんが、そのシーンです。どうもここから来て来ているようなのです。

阿修羅と帝釈天の戦いも仏と魔との戦いであるわけです。そして、お釈迦さんを邪魔しようとする第六天魔王の場合も、やはり仏と魔との戦いである。両方、仏と魔の戦いということで共通していますから、釈迦伝の図柄が六道絵に持ち込まれたのではないかなということが考えられます。そんなような、ちょっと面白い図柄です。こうしたものは画家なり、あるいはその絵を指導しているお坊さんなりが、六道絵を描く場合にも、六道絵のことだけ勉強しているわけではなくて、そのほか勉強した、いろいろなことをその絵の中に反映させようとしているのだということが見てとれるのではないかと思います。

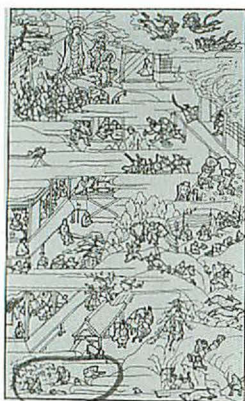


図71-a

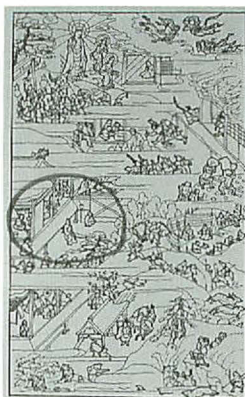


図70-a

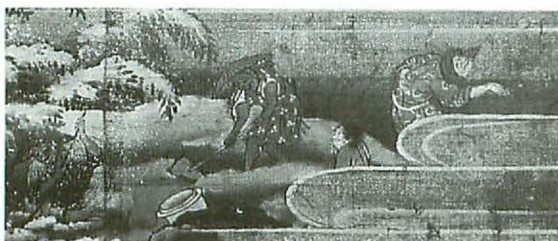


図71-b



図70-b

一〇、人道・天道

阿修羅道を抜けましたら、人道、人間世界です。人間世界というと、四苦八苦と申しまして、大きく八つの苦しみがあると説明されます。生老病死、生まれるところから死ぬまでに四つの苦しみがあ、それにもう四つ副次的な苦しみがあつて、四つと四つを足して八つの苦しみになるわけですが、それを順次見ていきましょう。

(図70) 今見ているのは、出光美術館の「六道十王図」、六幅本のもです。今見ているかという、出産している場面です。女の人が抱えられて、うーんと出産しているところ。旦那さんは外でピンピンと弓を鳴らして、魔物が近付かないように努力をしているところ。ただ、屋根のつぺんをよく見ると、魔物がもう既に近付いて来ているわけです。危険です。ひよっとしたら、この子供は丈夫に育たないかもしれない。まず一番最初、生まれる苦しみ、生苦が描かれまして、その次には年を取る苦しみが出てまいります。

(図71) ここに出てまいります。通常の老苦は杖をついて歩くお年寄りの姿で表現されるのですが、出光美術館はちよつと変わった工夫をしています。ここでは老人を巡る三つのお話が語られているのです。いずれも孝行息子のお話として流通しているのですが、老人が係わってくる。

左端は、年を取ったお母さんが冬場に筒が食いたいと言うものだから、息子が冬の竹林の中で一所懸命筒を掘るとい場面です。結



図73
a



図72
a

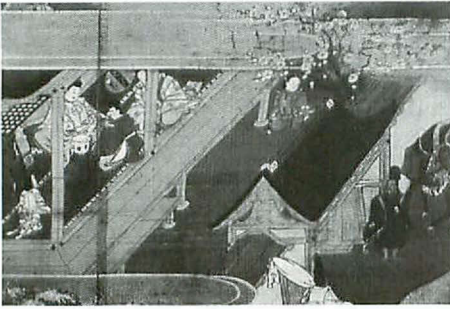


図73
b



図72
b

局、天の神様が彼を気の毒に思つて筍を生やしてやるわけです。孟宗という人物です。あの孟宗竹の孟宗です。そのお話が出てきます。あるいは、中程は、年を取つた両親に腹いっぱい食事を食べさせてあげられないことを悔やんでいる孝行息子が、食い扶持を減らすために自分の息子を畑に埋めてしまおうと穴を掘つているところです。孝行もここまでいくとちょっとこわいですね。神様が、「おーい、ちよつと待て」と言つて、穴から金の釜を出すわけです。「この金の釜を売るなり何なりしてみんな仲良く食べなさい」と天の神様が言うわけです。そこでこの子を埋めずに済んだというお話です。

あるいは、右端では、おじいさんがお手玉をしておりますが、これは老菜子という孝行息子の話です。息子と言つても既に七十歳を超えておりますから、御両親は九十歳を超えているのでしよう。ご両親に老いを悟らせないために、彼はいつも仕事から帰つて来ると子供服に着がえて子供のふりをするわけです。お手玉して遊んだり何かしていれば、お父さん、お母さんは、「この子もまだまだ小さいから、わしらは頑張らんとな」と勘違いするわけです。そうやって老いを悟らせないようにするというお話。

いずれも老人に結び付くお話が紹介されています。ここでは単に老いの苦しみをとらえるだけではなくて、もう一つ、孝行ということとを主張します。孝行とはどういうことになるのか。これは、その親が死んだ後はちゃんと供養しておやいなさいよということにつながります。十王の裁判の都度に、ちゃんとちゃんと供養してあげる

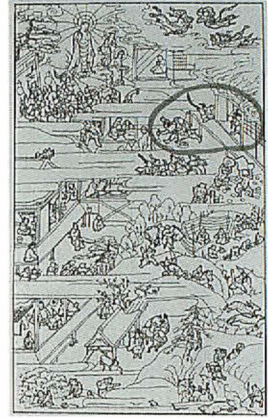


図74 a



図74 b

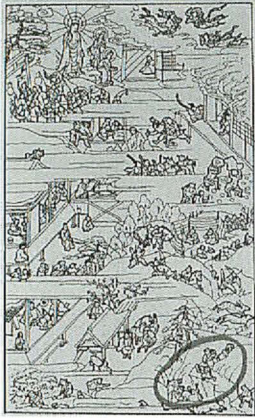


図75 a

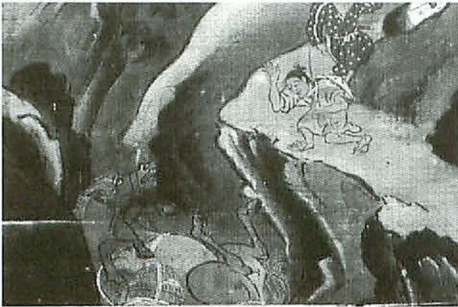


図75 b

ことが大事ですよということになります。そのようにして、単に老いの苦しみを語るだけではなくて、もう一つ、親孝行ということ进行宣传して、その結果、死んだ人があの世をへ巡っている間に行われる法事をきちんと行いなさいよというメッセージを込めることをしているわけなのです。なかなか上手です。

(図72) そして、死苦、死の苦しみですね。病苦はどこに行ってしまったのでしょうか、見つかりません。死苦が出てまいります。布団の中で今まさに死にかけているこの人のところへ、鬼たちが迎えに来ています。どうもどこかに連れて行かれてしまうみたいです。

(図73) そのほかにも幾つか副次的な苦しみがありません。これは愛別離苦です。仲のいい者同士が別れなければいけない苦しみ。人生には別れという苦しみが常にあるわけですが、それが紹介されます。

(図74) こちらは怨憎会苦です。仲のいい者同士が別れるのも辛いですが、仲の悪い者同士が会おうのもなかなか辛いんです。会社なんか行きたくなくなります。ここでは盗賊が襲撃する。まさしく仲の悪い者同士の最たるものです。物を取って行くだけならまだしも、その上、火までつけていくわけです。それはこの人も怒ります。どつちか一つだけにしろと言いたくなります。そうした様子が描かれています。憎しみ合った者同士が会おうと、必ずこうした刃傷沙汰が起きるわけです。

(図75) ここに描かれているのは、求不得苦。求めようとしても得られない苦しみです。何か欲しい物があっても、それが手に入らないのは

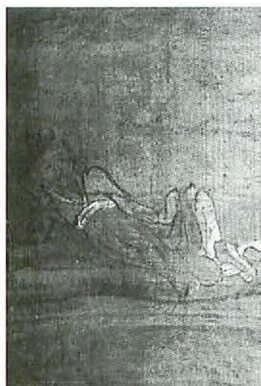


図78



図77

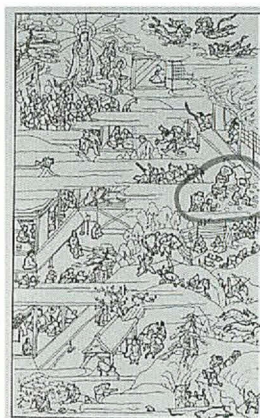


図76
a



図76
b

苦しいですね。そうしたものです。ここでは、馬に荷物を背負わせて、さあ目的地に着くぞと思ったところで、馬が落っこちて行ってしまうわけです。本来これは彼のものになるはずだったわけですが、落っこちちゃって、おしゃかになってしまいうわけです。得られない。ああ、もつたないと思っけていても、もう手遅れです。そんな様子が描かれています。

(図76) 最後に出て来るのは、これはちょっと説明しにくいものなのですが、五陰盛苦というのが有るのです。これは何かというと、業の力がたまつて、その結果起きるさまざまな苦しみというような意味合いのようなのです。そうしたことはどんなことで表現されるかというと、しばしば火事で表現されます。この人たちは何をやってるかという、今、火の粉を一所懸命振り払つたりしている、火事を消そうとしているシーンです。火消しの当番みたいな人がいて、指示を出しております。仏教の中では、火事も人災とは考えずに、業がたまつた結果に起きる災いと認識されていたようです。

このような八つの苦しみが存在している。人間世界にはいろいろと苦しみがあるのだよということが紹介されて、そして最後、天道に行くわけです。

(図77) 天道にもやはり苦しみはあるのよということが、六道絵では本来は語られるべきなのです。こちらは禅林寺の「十界図」、鎌倉時代、十三世紀のもので。天では、御飯が空から降って来たり何かして、それはそれは楽しいのだが、そうした楽しい天の暮らしもやがて終



図81

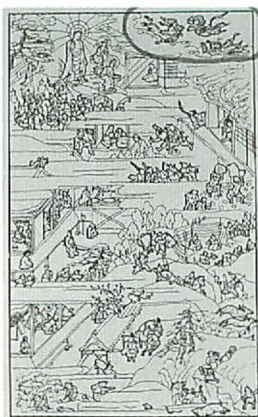


図80
a



図79



図80
b

わりが来る。終わりが来ると、天人はさまざまな衰えの相を示す。長生きした分だけ、人間世界よりもよっぽど苦しい死の間際を迎えなければならぬのだよということが語られるわけです。

しかし、このようにして天の楽しみと苦しみとを一緒に描くということは、どうも日本人の好みに合わなかったようです。それはそうです。お話の中でもしばしば、天に生まれ変わりましたとき、めでたしめでたしで終わってしまうお話が随分たくさんありますから、天が苦しみの世界ということはどうもびんとこない。ですから、やがて、天の世界から苦しみだけ切り離す作業が起きます。

(図78) これは大阪の茨木市の水尾地区にある「六道十王図」なのですが、ぼうっと寝ころがっている人が天で苦しんでいる人の姿なのです。

(図79) しかし、これとはちよつと切り離されて、天全体が随分上の方に、別個に楽しいことだけぼんと描かれたり何かして、さっきの絵柄はずっと下によく描かれることになるわけです。楽しい天とつらい天とが切り離されます。そして、やがてつらい天は忘れ去られていくことになり、楽しい天だけが残ってしまうことになるわけです。

(図80) 例えば、出光美術館の「六道十王図」の最後の幅を見ますと、天の様子は全然苦しうに描かれていないのです。天が苦しいということは日本人にはあまりびんとこなかったようでして、結局、天は極楽とごっちゃにされて処理されてしまうことになるようです。

(図81) よく見ますと、天人がぶかぶか浮いているすぐ横つちは、阿弥陀さんが今死のうとする人をお迎えにやってくる様子が描かれてい



図83
a

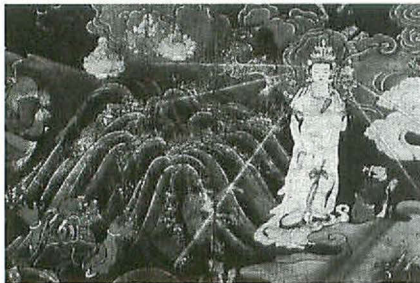


図83
b

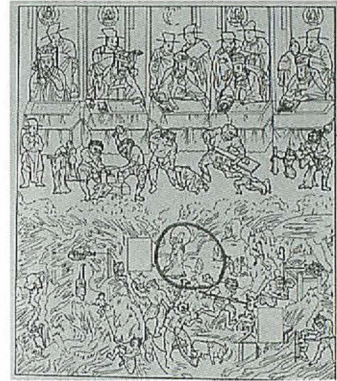


図82-a

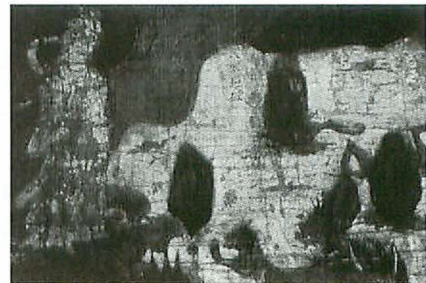


図82-b

まして、阿弥陀さんのお仲間のような印象でもとらえられそうな感じに描かれているわけです。最終的には日本人は、天も極楽も一緒だよねという感覚で話をおさめようとしていたのかなということが見えてまいります。ですから、厳密な意味での六道世界観というものはここでは反映されていないということになるでしょうか。

一一、さまざまの救済

さて、こうやって六道世界を順次経巡りながら罪を清めていった挙句に救済にあずかることになるわけです。もちろん、何がしかの仏さんとコネをつくっておいた人たちは、そのコネによって途中で助け出してもらったりする例もあります。

(図82) これは出光の「十王地獄図」の方なのですが、よく見ると、下の中ほどに、今まさに観音さんに助けてもらえることになり手を合わせて喜ぶ亡者の様子が描かれています。岩が降っていたはずの所に蓮の花がはらはらと降って来て、何だろうと思ったら観音さんがやって来て、「君は生前よく私の所に拜みに来てくれたね、助けてあげようか」と助けに来てくれていたわけです。コネをつくっておくといいいのですよ。観音さんは地獄や六道での苦しみから人々を救ってくれる仏として最も古い伝統をもっている仏でして、観音さんが救いに来るとするのは「六道十王図」の方でも出てまいります。

(図83) 地獄の釜でぐつぐつ煮られていたところに観音さんがやって来て、「一括して助けてあげましょう」と言って、ピカッと光ると、地獄

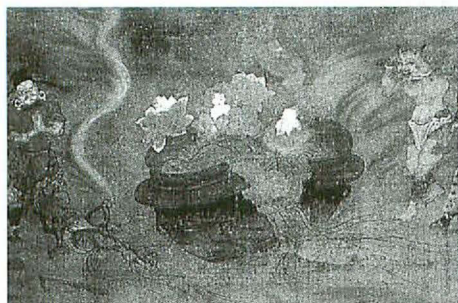


図85



図84

の釜がパカパカパカッと割れるわけです。そして中で茹でられている人たちはみんな蓮の花の上できれいな魂となって極楽へと迎え入れられることになる、そんな様子が描かれています。これがその観音さんです。仲良くしておくということがきつとあります。

(図84) 余談ですが、画家の筆がちょっと走り過ぎている例を御覧に入れます。地獄の釜が割れると、大体、鬼というものは困った顔をするものなのですが、今の場面の中に一人だけ、すごくきれいな目をして、感激している鬼がいるのです。「こんな所で仕事をしていたけれども、何ていい所に出くわしたのだろう」と、すごく喜んで合掌している姿がある、そういう図柄であります。何となく、往生する亡者とこの鬼、目を見交わしているような感じがあって、「僕もこんなふうになりたいな」なんて思っている節が見えて、ちょっと可愛らしい。実は、出光で調査させて頂いてから、この部分の写真を引き伸ばしまして、今、私は自分の研究室に飾っているのです(笑)。すごく可愛らしくて、私、この鬼、大好きなのです。ということ、ちょっと御紹介しました。

(図85) 釜が割れるというのは六道絵の世界ではしばしば描かれることでして、聖衆来迎寺の「六道絵」でも、やはり釜がぱくつと割れて亡者が往生して行く様子が描かれています。地獄が破られるというイメージを釜が割れるというイメージで表現することが、鎌倉時代以降には随分と一般的にあったわけです。そういう時には鬼卒は大体こうやって途方に暮れるのが例なのです。それはそうです。町工場

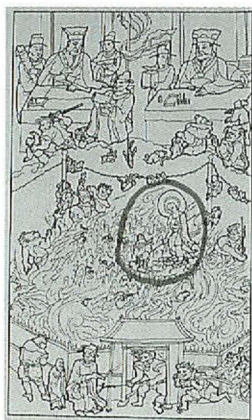


図88-a



図87-a

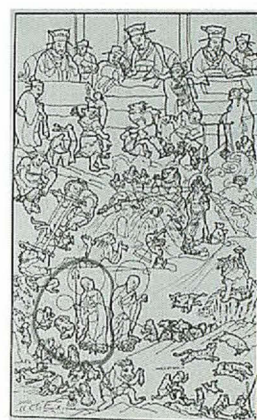


図86-a



図87-b



図86-b

で、自分の工場の機械が壊れたら、工員の皆さん、愕然としますものね。それと同じことだろうと思うのです。先程の鬼だけ、何故だか、非常に目がきれいですよ。

〔図86〕

さらに、観音さんよりも少し遅れて人々の信仰を集めるようになった六道救済の仏としては、お地藏さんがあります。お地藏さんはやがて地獄の主宰者として位置付けられるようになり、観音さんのお株を奪うこととなりますが、そのお地藏さんも随分といろいろなところで救済をしています。例えば、ここでは、お地藏さんが「助けてあげようか」と言って餓鬼を今まさに救い出しているところで。この場面に描かれた日輪は、救済して極楽へ往生させるような機能をもっているのかもしれませんが、ちょっと判然としません。

〔図87〕

その横では、冷たい風が吹き当てられて背中がずり剥けてしまった亡者たちの所にお地藏さんがやって来て、「助けてあげようか」と言っています。「ぜひ助けてください」というふうに、杖にすがりついている亡者がいます。この人も多分、お地藏さんにちゃんとお参りしておいたのでしょうね。備えあれば憂いなしです。

〔図88〕

これは先ほど見ましたが、黒繩地獄でも、ぶくぶく茹でられている人をお地藏さんが救いに来るといふシーンはあります。

〔図89〕

これは京都の矢田寺が持っています「矢田地蔵縁起絵巻」の中のシーンですが、釜茹での中でお地藏さんが救いに来るといふシーンは、こんなふうによく出て来ます。これは矢田寺のお地藏さんが武者所康成というお侍さんをわざわざ助けに来てくれるシ

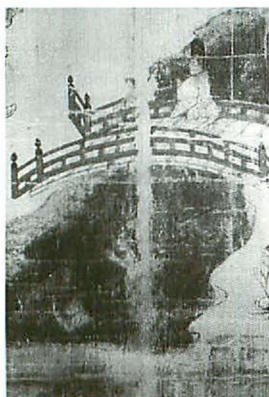


図90



図89



図88-b



図91

ーンです。やはり釜の中から助けてくれる。縁を結んでおいてよかつたなということ。ほかの人たちはうらやましそうです。そういう様子が描かれています。

(図90) そんなふうに縁をつくっていた人は途中で拾ってもらえるわけですが、縁をつくらなかった人は六道を順番に巡歴して、自分の罪を清め終わって、もう一度橋を渡り直して極楽へと向かうことになるわけです。いろいろな橋の渡り直しのシーンがあります。これは極楽寺が所蔵する十三世紀の「六道絵」にある橋の渡り直しのシーンですが、一人だけ渡って行きます。

(図91) こちらは水尾地区の「六道十王図」にある十四世紀の初め頃の橋の渡り直しのシーンです。よく見ると、橋を渡り直すに当たって、先導してくれるお坊さんが出て来ています。このお坊さんは一体何者なのだろうか。よくわかりません。けれども、これよりも五〇年ぐらい後になるのでしょうか、出光美術館の「十王地獄図」になりますと、このお坊さんが何者なのかが見当つくようになります。

(図92) それがお地藏さんだとわかるようになるわけです。随分まとめて救って行きます。四人まとめて救って行くわけです。お地藏さんに先導されて、極楽世界へと向かって行く、そうした様子が描かれています。橋を渡って六道巡りをした挙句に、もう一度橋を渡り直して、罪を清めた体を極楽へと導いて行ってもらおう、そうした構造が読み取れるようになっていくわけです。

(図93) もちろん、それは「六道十王図」の方でもあります。やはりお地



図94



図93-a



図93-b



図92-a



図92-b

蔵さんが男女二人組を別の世界へと連れて行こうとしている。喜んでいきますから、もちろん極楽へ連れて行ってもらえることがわかります。そんなような様子があります。ただ、こうやって見ていくと、入るのも出るのも同じ橋だと、何しているのか、いまひとつよくわかりにくいわけなのです。

(図94) そんなこともありまして、もう少し時代が下って江戸時代の頭ぐらいになりますと、長岳寺の「六道十王図」では、あの世に入る三途の川にかかっている橋はそれだけでまず表現して、こうやって渡らせるわけなのですが、そこから出る橋はまた別に描くのです。

(図95) 太鼓橋になっていまして、そこを渡ろうとすると観音様が迎えに来る。観音様の後ろには、実はもう一幅ありまして、阿弥陀さんたちがどさっとやって来るシーンが描かれています。悪道へ入って、そして出る。入る橋と出る橋とを描き分けることによって、入ること、出ることを長岳寺の「六道十王図」では強調しようとしているわけなのです。

こちらはそのようなことをわかりやすく説明しようとしているわけです。もちろん、出光美術館の「六道十王図」もおそらくは、ちよつとややこしいですが、同じことを伝えようとしているのだと思います。人間が死んで、山を越えて橋を渡って、六道世界を経巡りながら罪を清めて、そしてもう一度橋を渡り直して極楽へと迎え入れられる。随分長々と話してきましたが、つまり、そういうことなのです。日本人はいろいろ細かい工夫をしながら、当初は車輪の



図95

ようなイメージであった六道世界観を一本の道にしてしまった。死んでから、あっちへ行ったりこっちへ行ったりして、自分のした細かい罪を清めて、その果てに極楽に迎え入れられようとする、そうしたイメージを「六道十王図」をはじめとする作品の中で確認したかったのだらうなということが、こんなものを見ると、わかっているのではないかという気がします。

おわりに

今日は、「地獄極楽道中案内」と題しまして、日本人の抱え込んでいたあの世のイメージというものを、実際の絵に即して眺めてまいりました。こうやって見てまいりますと、こうした地獄絵や六道絵は、悪い人のためでもない、いい人のためのもでもない。いい人はもちろん、悪い人でも極楽に行けるのだよということが、どうも、

こうした作品の眼目であったということがおわかりになると思えます。地獄絵を見ておきますと、拍子抜けするぐらい、面白おかしき場面が幾つもあることがあります。何故でしょう。それはおそらくは、その地獄が人々を脅しつけるための地獄ではなくて、そして人々を甘やかすための地獄でもなくて、言ってみれば、罪を犯した人たちに、罪をそれ相応に償えば、その先に必ず楽しい世界が待っているのだよと語りかける、ある種の眼差しのやさしさがそうしたものを形づくったのではないのかなという気が私などにはいたします。皆さんはどのようにお感じになるでしょうか。また、そうしたことを念頭に、もう一度作品を御覧になっていただければと思います。

(愛知教育大学助教授)

Idemitsu Museum of Arts

Bulletin

121

219th Wednesday Lecture: Introduction to the Travel through the Paradise and Hells
– The Afterlife as Expressed in the Pictures of Six Realms of Creation 六道絵 – Part 2

Takasu, Jun 2

This is the second part of the lecture. The story of the “Travel after Death” is discussed with examples of two paintings in the Idemitsu Collection, “Ten Kings of Hell and Scenes of Punishments 十王地獄図” and “Six Realms of Creation and Ten Kings of Hell 六道十王図”, as well as other examples of the same theme. Part Two explains each of Six Realms, of Hells 地獄道, Hungry Ghosts 餓鬼道, Beasts 畜生道, Asura 阿修羅道, Humans 人道, and Heavenly Beings 天道. Then, the author concludes with the Japanese understanding or alteration of this “Travel after Death” as something linear in overall layout, which is not exactly the sutras describe and is the original rearrangement of this concept by the Japanese.